

## 折々

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 石坂, 正藏  |
| 雑誌名 | 龍南  |
| 巻   | 2 0 2   |
| ページ | 7 0 - 7 0   |
| 発行年 | 1927-07-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2298/8956">http://hdl.handle.net/2298/8956</a> |

# 折

々

石坂正藏

しんしんと霜こごる夜の静けさに思ふことなく火にあたりをり  
 うら／＼と晴れ渡りたる如月の眞晝の光身に泌みにけり  
 黒土の麥の芽生えに陽炎の搖らぎ上れり春立つらしも  
 雲おほへる夜更の空に楠の黒々としてざわめきにけり（父の墓に詣でて）  
 こもりたる電車の中のいきれ空を見れば空はくもれり  
 診察室のガラスの外に曇り日の冷き色を見たりけるかも  
 あさ黒き肌は悲しも兒の吸ひし乳房を母はをくさざりけり  
 夜の雨靜かに降り蚊の吸ひし乳房を母はをくさざりけり  
 ひつそりと溝川の邊に日の照れり顔剃りて居る掃除人夫ら  
 赤々と西日さしたる障子に鳥の影ふつと通りすぎたる  
 雨降りの電車の中で温味ある二錢銅貨を釣にもらへり  
 ふと母にあらき言葉を言ひて見てやがて悲しくなりにけるかも  
 我のみに頼れる母を思ふ時悲しくなりて涙流せり  
 淋しさは母の心よ腹立てる我に向ひて物のたまはず  
 床にゐて母の溜息聞きぬたり腹立ち止みし後の淋しさ  
 腹立ちて手あらく閉めし戸の音を母は淋しく聞きたまふらむ